

トレイン

と

レイン

イヤホンのL-Rからは斎藤和義の『真夜中のプール』。

会社帰りの電車内。腕時計は十八時を指していた。

外はもう暗く、雨が次々に窓に張り付き、零が一斉に斜めに線を走らせる。窓に映る俺の顔は電車の動きに合わせて重く揺れる。少しづつ速度を落としていくその車内の灯りは、誰彼構うことなく機械的に照らしている。

駅に停車してドアが開くと晴れ着姿の女性が乗車してきた。今まで色彩を失いかけていた車内が彼女の存在でにわかに色を取り戻したように感じる。まるでぎりぎりの心肺蘇生が功を奏したかのように空間の密度が増す。今日は成人式だった。しかし二十九歳の俺には遠い過去のことと関係はない。

隣に座っているのは母親だろう。どことなく目元が似ている。
ふと母親の気持ちを考えて胸がいっぱいになつた。

二十年前に産んだ子供をここまで育て上げるのに、一体どれだけの愛情を注いできたのだろう。その二十年間で娘の記憶に刻まれた風景の、おそらく何倍も何十倍も多くの情景と想いが、同じ二十年間でこの母親には刻まれているはずだ。そうやって育てた自分の娘が晴れ着姿で笑っている。

この母親には、これ以上に心を満たすものはないかもしれない。

そんなことを考えると、この電車内で視界に入る全ての人がそれぞれ他人には見えない自分だけの歴史を背負って、今ここにいるんだと落ち着いた。

俺の向かい側のドア横に立っている会社員風の中年男性。奥さんはいるのだろうか。子供もいるかもしれない。疲れた顔をしてる。そんな顔をしてまで働くのは誰のためだろう。彼の人生はもうき

つと彼だけの人生じゃない。愚痴の多い俺の上司を少しだけ許せる気がした。

さつきからずいぶん電車が動かない。イヤホンをはずして車内アナウンスに耳を傾けるとどうやら人身事故らしい。俺が降りる駅は今停車している駅から二つ先だ。急ぐ予定もないのに気長に待つことにしたが、遅れたダイヤのせいで次々に乗客が増えていく。

混んできた車内で肩を叩かれた氣をして振り向くと見覚えのある顔をした女性が立っていた。

「もしかして：えっちゃん？」

「うん、ほんっと久しぶりだね！」

えっちゃんこと絵美は、家が近所で幼稚園の頃からの幼なじみだった。彼女は中学二年生の夏、隣町に引っ越した。

「ミー君、おじさんもおばさんも元気？」友達の中で俺の「実」という名前を「ミー君」というだ名で呼ぶのは、えっちゃんだけだった。

「元気だよ。えっちゃんのおばちゃんは？」

「うん、まだまだ元気！」

「えっちゃんのおばちゃんのホットケーキ美味しかったよなあ。よく一緒に作って食べたよね」

えっちゃんの家は母子家庭で、一人娘のえっちゃんはおばちゃんにすごく大事に育てられ、俺のことも実の子のように可愛がってくれた。今思えば、おばちゃんは女手ひとつでえっちゃんをここまで育て上げたのだ。おばちゃんは水商売風の仕事をしていたというほんやりとした記憶しかないが、それでもたまの休みにはえっちゃんや俺と遊んでくれていた。

おばちゃんはいつ休んでいたんだろう。無理をしてでも子供に愛情を注いでいたのだろうか。それ

ともえっちゃんや俺と一緒にいることが何よりの癒しだったのだろうか。今の俺にそれを計り知ることはまだできない。

えっちゃんは俺の両親にもすごく可愛がられた。

毎年一緒に過ごした誕生日会やクリスマスでは、いつもえっちゃんのケーキの方が俺のより大きくなつ切り分けられていた。ある年、二人に色違いでおそろいの手ぶくろを編んでくれた俺の母に、えっちゃんは小さい雪だるまをプレゼントしていたこともあった。一つ思い出すとそれが小さな風を起こし、その風が長い間貼り付いて開かずにいた記憶の頁が次々とめくっていく。

母親が水商売をしていることでえっちゃんは何度かいじめられたことがあった。俺はその度、えっちゃんのおばちゃんの料理がおいしいだの、歌がうまいだと、いじめっ子たちに反撃をしていたが結局は二人共泣かされて帰った。

「懐かしいね」そう言つてえっちゃんを見ると、えっちゃんは晴れ着姿の女の子に目線を落としていた。

「成人式だったみたいだね！」

そこまで喋つて俺は自己嫌悪に陥つた。えっちゃんは成人式に来なかつた。来なかつたのではなく、

来れなかつたのだ。

俺らの成人式のひと月ほど前のことだつた。

「みのる、えっちゃんね：子供堕ろしたんだつて：」台所で料理をする母が背中越しにそう言つた。母の知り合いが産婦人科で働いていて、なんとなく伝え聞いた話だと言つていた。

「絶対誰にも言うなよ！」珍しく声を荒らげた俺に母は少し驚いたあと「あたりまえでしょ」と微かに肩を震わせていた。

「で、でもあの日も雨だつたし、来なくて正解だつたかもね」

俺は必死に繕おうとしたがそんな下らないことしか言えない自分が情けなかつた。そしてそれがえつちゃんに全てを悟らせてしまつた。

「ミー君、知つてたんだね：」

「……うん、でも：知つてるのはたぶん：俺だけだと思う」

沈黙が重かつた。車内アナウンスでも何でもいいから間を埋める何かが欲しかつた。えっちゃんはこの九年間、ずっと罪の意識にさいなまれてきたのだろう。そしてきっとこれからも。

「お母さんがね：」えっちゃんは俯いたまま口を開いた。

「お母さんがね、私が病院で手術を受けたあとに言つてくれたの」息を飲んで間を置いたあと、震

える声で続けた。

「『幸せになりなさい』って…」えっちゃんは唇を噛んでまた俯いた。俺も視界が滲むのを堪えるのが精一杯だった。

母親の愛とはなんと大きいのだろう。罪の意識と自責の念に挟まれた娘に、他の誰がそんな言葉をかけてあげられるだろうか。

「わたし、あの言葉が無かつたら生きてこれなかつたかも…」

えっちゃんは視線を上げると、強い意志を宿らせた瞳で深く息をはいた。きっと今まで何回もこうして耐えては、おばちゃんの言葉に励まされてきたに違いない。

「ねえ、疲れたよー」俺達のすぐ側から男の子の声がした。小学生だろうか。えっちゃんの前の席が空いている。えっちゃんは俺の脇腹を軽くつついた。俺は一瞬その意図を汲みかねたがすぐに分かった。

「あの、どうぞ」俺がその男の子の母親にそう促すと「申し訳ありません」とその母親は恥ずかしそうに息子を座席に座らせた。えっちゃんはその男の子をまっすぐ見つめている。もしえっちゃんの子供が生きていたらちょうどこの男の子くらいかもしれないと思うと、えっちゃんの顔をまともに見ることができなかつた。

しばらくの沈黙の後、涙を振り払って急に笑顔になつたえっちゃんは俺の服の裾を引っ張つた。

「あつ！見てあれ！」えっちゃんが指さした先には車内広告があつた。来月から始まるミュージカルの宣伝広告のようだ。

「ほら、出演者の最後から二番目！『田村聰』ってあの聰くんだよ！」

「あのいじめられっ子の聰!?」

「うん。わたしの同僚にミュージカル好きの人がいてさ、小さいインタビュー記事だつたけど小学校の時の話が載つてて、わたしと同じ出身だつてことで教えてくれたの」

「へえ、あいつが役者ねえ。みんな頑張つてんだなあ……みのる」

「『みつを』みたいに言わないでおお……えみ」

自然に笑いがこぼれる。えっちゃんはいつだって、自ら明るく努めようとする子だつた。

「このミュージカル観に行きたいなあ」

「いいね。どうせならおばちゃんも一緒に連れていくよ、それで帰りにホットケーキでも食べよう！」ミュージカルの題名は『ゴースト』。あの有名な映画をミュージカル化したらしい。

「みんな元気かなあ、会いたいなあ」えっちゃんはため息のように言葉を漏らす。

「うん、会いたいね」

「でも、ミー君に会えて良かつた。ありがとね、本当にありがとね。頑張つて幸せになつてね！」えっちゃんがそう言うと、車内アナウンスが運転の再開を知らせた。発車のベルが鳴り響き、電車が動き出す。

「えっちゃん、連絡先教えてよ」

「ごめん、さつき携帯壊れちゃつて。ほらっ」えっちゃんの携帯電話は画面が割れ、ところどころ

部品が無くなっていた。

「どうしたのこれ？」

「うん、ちょっとね……」

そういうしているうちに電車は次の駅に着き、えっちゃんは人ごみに消えていった。そこからまたしばらく電車は動かなかつた。

次の日の朝、俺は電話のコール音で目が覚めた。母からだつた。

「もしもし、みのる？えっちゃんが……えっちゃんが……」

「えっちゃんなら昨日電車であつたけど、何？」

「電車に轢かれて……」

一瞬、本当に心臓が止まつたと思う。母の声が震えている。

「踏切に残された子供を助けようとして……子供は助かつたみたいなんだけど……えっちゃんは……即死だつたんだって……」

「……嘘だろ？……だつて……え……嘘だろ……」

「昨日の夕方の六時頃だつて……あんたいつ頃会つたの？」

「ちょうど、六時頃だよ……人身事故で止まつた電車の……」

えっちゃんはその日、女友達とある教会に立ち寄つたらしい。その後、一人で帰つていると少年が踏切に残されいるところに遭遇したようだ。目撃者によれば、迫つてくる電車とその警告音の怖さで腰を抜かして動けなくなつた少年を突き飛ばす形で線路に突つ込んだらしい。

その後の数日はえっちゃんの葬儀の手伝いで落ち着かなかつた。お通夜の日、えっちゃんのおばちゃんは大事な一人娘が亡くなつたことをまだ受け止めきれないようだつた。

「あの子ね、ちょっと前にね、『今度こそお母さんに晴れ着姿を見せられる』って。『その晴れ着は振袖じゃなくて、真っ白いドレスなんだ』って：そう言つたの：」

そこまで言つておばちゃんは泣き崩れた。えっちゃんが事故にあつたのは、結婚が決まつた二日後だつた。

写真の中のえっちゃんはただ笑つている。

ようやく落ち着いた日の午後、母親と一緒にその踏切に花を手向けに行つた。

「えっちゃんは本当にやさしい子だつたからねえ。もしもあなたが言つたのが本当なら、最期におんたにお札を言いに来たのかもね」

「お札？」

「あんたは覚えてないかもしれないけど、えっちゃんが一度、幼稚園で高熱を出したことがあつてね。えっちゃんのおばさんは連絡がつかなくて、うちで預かつたのよ。そのとき寒さで震えてたえっちゃんを見て、あんたは同じ布団で寝て温めるつて聞かなかつたんだよ。結局あんたも風邪を引いちゃつたけど。それからだつたねえ、えっちゃんがあんたのことを『ミー君』て呼ぶようになつ

て、兄妹みたいに慕うようになつたのは」

カンカンと踏切が鳴る。雨粒が俺と母親の頬を伝う。

事故から四ヶ月後、休みを使ってえっちゃんのお墓参りに行くことにした。何だかんだと忙しさにかまけて、今まで墓参りに足を運べなかつた自分を恥じる。

もあり、どこまでも果てしないようにも見えた。

平日の昼間ということもあり、墓地には俺一人だ。七十歳か、もう少し上に見える住職にえっちゃんのお墓の前まで案内してもらう間、軽い世間話をしながら石畳の上を歩いた。

「いい天気ですねえ、遠くから来られたのですか？」住職は細く、それでいてハッキリと聞き取れる声で言つた。

「そんなには。車で二十分くらいです。それにしてもここは静かでいいところですね」

「はい。心の落ち着く場所でなくては、お墓参りの本当の意味が無くなってしまいますから」「本当の意味？」

住職は、俺の数歩前を歩きながら淡々と続けた。

「お墓にしたって仏壇にしたって、花をお供えしますがよくよく考えると少し変だと思いませんか

？例えばあの花も」 そう言つて、花が供えられた墓を指さした。

「あの花が、仏様にお供えされているものであれば、花は墓石の方に向けてお供えしなければおかしいじゃありませんか？でもご覧なさい、花はお墓参りをする人の方に向けてお供えされています。それはお墓参りをする人が目をつぶり、手を合わせて故人を偲ぶそのとき、その人の心のなかにこそ、極楽が存在するからです。ですからあの花は、拌んでいる人の心にむけてお供えされているのですよ。騒がしいところでは心に極楽は訪れません。だから心落ち着く静かなところでなくてはいけないので

住職の言葉はすんなり俺の中に落ちてきた。

えっちゃんのお墓の前に立つた。

墓石の重々しさと、そこに彫られたえっちゃんの苗字を見て本当にえっちゃんは死んでしまったのだと体全身で理解した。思えば、どこかその事実から目を逸らすためにお墓参りを避けていたのかもしれない。

花が供えられている。おばちゃんだろうかと思ったが、もしおばちゃんならこの季節に咲き誇る、えっちゃんが大好きだったタンポポを供えるはずだ。

「どなたか来られたみたいですね？」俺が尋ねると、住職は微笑んだ。

「ええ。女性の方が毎月いらっしゃいます。故人を『息子の命の恩人』と仰ってましたよ」あの日、えっちゃんが自らの命と引換えに助けた少年の母親だ。

「そうですか。息子さんも一緒でしたか？」

「ええ。まだ小学校に上がったばかりだと聞きましたが：やはり分かるんですね。故人が命と引換

えに助けてくれたことが。お墓の前で涙をこらえきれず泣いていましたよ」「えっちゃん…えっちゃんが助けた子は優しい子みたいだよ。

「お恥ずかしい話ですが…」住職は少し視線を上げ、遠くの青を眺めて言った。

「この歳になりますとね、ちょっとやそっとでは心が動かなくなってしまうのです。どうしたって日々の色彩が薄れていってしまうものなのですよ…あなたにはまだ早過ぎる話ですがね」返事に困る俺に、住職はまた微笑んだ。

「でもね、その母親が息子さんにかけた言葉は、この老いた心に涼風を吹き込んでくれました

「…その方は…なんと仰ったんですか？」

「優しく『幸せになりなさい』と…」

石畳の端に咲いたタンポポが、風に少し揺れた。

おしまい。